書　評

現代都市における教会の体勢

ギブソン・ウインターの近著を中心として

Gibson Winter, The New Creation As Metropolis
The Macmillan Co. New York, 1963

ギブソン・ウインターはシカゴ大学神学部で社会倫理学の講座を担当している中堅の学者である。彼の著作には, Love and Conflict と The Suburban Captivity of the Church, 1961 がある。前者においてキリスト教の性に対する理解を検討したが，後者においては，アメリカの教会の社会的制度形態に分析のメスを入れ，とくに，米国のプロテスタント教会勢力の根拠地となっている郊外の住宅地における教会の実態と研究した。彼によるとその標題の示すごとく，アメリカの教会は郊外の住宅地の文化の捕囚 (The Suburban Captivity of the Church) となっていることを批判的に論述している。

さいきん数年にわたって制度的な教会に対する社会学的な批判が宗教社会学者たちによってなされてきた。とくにその代表的な急先鋒としてピーター・バーガーをあげることができる。彼はドイツにおいて宗教社会学の基礎的な訓練をうけた学者で，ハートフォード神学校で教鞭をとっていたが，本年より，ニューヨークのニュー・スクール・オブ・ソーシャル・リーサーチに移った。彼の代表的な著作として，次の二つがあげられる。

Peter L. Berger, The Precacious Vision, 1961 ; The Noise of Solemn Assemblies, 1961

ピーター・バーガーによって代表される社会学者からなされた教会の現状組織に対する批判は，たしかに鋭くその欠陥を指摘しているが，あまりにも否定的で，積極的な教会の革新を指向するというより，教会の制度そのものの否定に終る危険性をはらんでいた。この点において，必要とされていることは，教会の制度否定論 (De-institutionalization of Church) ではなく，教会の制度更新論 (Re-institutionalizatin of Church) である。

1

ギブソン・ウインターの新著は，右の様な期待に答えるにふさわしい内容をもった教会論であり，とくに，現代社会において決定的な影響を及ぼしつつある大都市の世俗的な状況において，教会がとるべき組織体制について建設的な討議をしていることは注目される。

本書はその標題の示す如く，新しく発展しつつある大都市 (Metropolis) の性格を把握し，その具体的な状況における教会の果すべき責任について論じている。彼は大都市の意味を次の様に説明する。

「大都市 (Metropolis) という言葉は，この世における神の民が今日おかれている新しい状況をいうのである。それは，起りつつある新しい社会であり，多くの相反した利害関係の対立の中に発展している。巨大な都会の生活の葛藤のなかから相互依存的な人間

社会が成長しつつある。」(二頁)

ウインターはこの大都市の状況を直視しそこにおいて教会が充分に責任を果すにはいかなる体勢をとるべきかについて検討をする。彼の分析によると，合衆国の教会は郊外の住宅地にその活動の根拠をもち，その倫理においては，個人的敬虔主義，その関心においては，子供の教育と個人の心理的均衡を助成することに限定され勝ちであり，社会生活の焦点となる肝心の都心の実体からはしだいしだいに遊離して了う実状を指摘し，それを「現代の大衆社会の力の中心からの教会の漸進的自己疎外」(the gradual alienation of religious institutions from the centers of power in modern society) として把える。

このような状況において，ウインターの主張する教会の性格は，ビリー・グラハムのような大量のクルセードをするのでなく，世俗的な都心の組織における人間の課題に応答してゆくものであり，その役割りを具体的に果してゆくものが信徒であると説く。

2

ここから彼の第2章の標題「世俗化された世界における僕(しもべ)の教会」(The Servant Church in a Secularlized World) が生れて来る。ここで彼は，世俗化 (Secularization) と世俗主義 (Secularlism) を区別し，前者は，宗教的権威からこの世の権威に責任を移管することを意味し，世界のすべての領域において神の前に自由にその責任を遂行する態度をそこに認めようとする。後者の世俗主義は，相対的なこの世の一部の力を絶対化し，人間の自由を否定し，人間を新しい拘束の中にとじこめることを意味する。彼のいう「僕(しもべ)の教会」にあっては，古い宗教的王国に人々を連れ戻そうとするのでなく，歴史に対する人間の自由を積極的に承認し，彼が責任をもって自由を行使することが出来るようにつとめる。「教会は，もはや，人間を拘束するさまざまなこの世の諸制度の一つとして存在するのでなく，神の恵みにみちた働きが，人類のすべての人々に対してなされていることを認め，歴史的な責任を，その世界の制度の中において果そうとする共同体である。」(55頁) ここにウインターは教会はその聖務(ミニストリー)を「仕える者」としてとらえ，現代の世俗化した都心の葛藤と組織の交錯の中で，人間を真の人間とする姿を発見し，助成する責任のあることを主張している。「世俗化された世界においては，聖務は責任ある社会えの決断の中に成就されるものである」(59頁) という。

3

この様な観点からウインターは，教会は今日次の二つの選択の中の一つをとるように迫られていると述べる。その一つは，住宅地に主力をおく従来からの教派的な教会の集会を強化し，この世から離れ，自己の内側における平和を保ち宗教的逃避の場を形成しようとする道である。それに対してもう一つは，郊外の住宅地温床に閉ぢこもらず，変動しつつある社会に影響を与えている組織機構の中において証と奉仕をなす教会となろうとする道である。(67頁)　現在，教会がなしつつある働きは，個人的訪問伝道であれ，大量動員をもってするビリー・グラハム式の大衆伝道であれ，究極においては，都心の課題を郊外の住宅地の眼からみ，個人的敬虔主義の色彩が強く，信徒は，この世の具体的な戦斗の場から逃避して了う結果に終っている。ここにおいて，ウインターは，第3章において教会が

「預言者的交り」としての性格を再確認し，その機能を発揮するように説いている。ウインターは米国の監督教会（エピスコパル・チャーチ）の牧師であり，教会の性格を単に「預言者的な性格」のみに限定しようとしない。彼によると，教会の歴史的な使命は次の三つの姿においてあらわれる。第1は，教会の礼典，とくに，聖餐において，キリストの出来事を想起すると共に，人間が新しく造られているという事実を確認し，明示する。第2は，その告白的な表明，とりわけ説教と証を通し，救いは，現在の事実であることを明らかにする。そして，第3に，預言者的な働きは，人間に望を与え，開かれた未来えと人間を向わしめる。

これらの三つの教会の働きは，過去，現在，未来という救贖史の三つの時点にかかわり，教会のおかれている歴史的現実を重視するものである。ウインターは，「人間というものは，未来に対する確信なくして存在し得ず，人間は，信仰なくして歴史に参与することは出来ない」という確信に立っている。世俗化された現代社会において人々の間に失われているものは，この未来に対する確信であり，この時代の教会の働きにおいて「未来は人間に開かれているということを明示すること」(54頁)　であると述べている。

さらに，現代人は大都市の生活において，未来に対する確信をもっていないのみか，現在の生活において「おそれ」をもっていることが指適される。

「今日の都市の生活において，人間が歴史的責任を果すように努力するときに横わっている主要な障害はおそれである。そこには，お互の社会的な差異に対するおそれ，いつ再び来るかも知れない経済的不況に対するおそれや破滅的な戦争えのおそれ，隣人たちがわれさきにと自分の防空壕えと閉ぢこもることに対するおそれなどがそこにある。」(86頁)

現代人は，個人の消費的欲望を促進され，とりわけ，マス・コミによる刺激を受け，他人と同じように振舞うことに敏感になっている。そこには，お互同志に遅れをとってはならないとする飽くことのない競争心が消費文化に色どられた社会に存在し，お互の関係は孤独と不安の中にある。「不安とおそれと絶望の3点の要循環が現代の大都市に住む人々の心の中にある」(87頁) とウインターはみる。

預言者的な交りとしての教会は，イエス・キリストにある神人の出来事をその根底に受けいれ，世俗世界と対話してゆくものであり，「その対話の共通のテーマとなるものは，人間性えの関心である。なぜなら，人間は，その奥深いおそれの只中にあっても，彼が探求する人間性を反映しているからである。」(88頁)

この点から，新しい信徒の姿勢づくりの必要性をウインターは説く。世俗社会において，教会の証と奉仕を社会の組織の中で遂行してゆくものは信徒であり，多くのキリスト者は，奉仕と犠牲の生活をする気持をもっている。ここで，教職者が，「信徒はこの世で証をすべきである」と公理的に言う丈では不充分であるし，また，古いピューリタン的な職業倫理をふりかざして，「あなたの仕事において，勤勉であり忠実でありなさい」という丈では肝心の問題を回避したことになる。ここで必要なことは，今日の牧会体勢の再編制であり，信徒がこの世の組織機構においていきいきとした人間として社会の前進と，人間性の回復のために働くことの出来るように研修することが今日における重要な牧会的配慮であ

る。そのために教会は，新しい信徒の研修プログラムを必要とし，また夫々ちがった領域（たとえば，大学，労働，経営，報道，婦人）や組織に働く信徒の訓錬をするセンターや指導者が必要とされており，また社会の組織の中にある人々と共通の問題を話しあうアカデミーの運動の意義を評価している。(85頁)

4

未来に対するおそれをもつ現代人は，お互同志に不信感を抱き，社会全体を結ぶ共通の紐帯を欠くようになる。

「人々が歴史が進んでゆく未来に対してはっきりとした考えを失って了ふとき，人々の間には，漠然とした欲求不満のおもい (MALAISE) が強くなる。今日，そのようなムードが米国の青年の中に強く存在している。」(100頁)

今日の都市の生活の中には，お互同志の信頼が失われ，相互の意思の疎通が充分になされていない。ちようど大学が一つの共同体である実体を失って，マンモス的寄合世帯となり，お互を結びあわせる共通の意味を欠きがちであるように，各個人間のみでなく各集団の間に，人種の間に，また，各階級の間に，さらに各地域社会の間に対立，不信，断絶が存在している。その最も端的な例を米国が今日深刻に悩んでいる人種問題にみることが出来る。ここでは，コンミュニケーションの欠如は憎しみと闘争を激化している。ウインターはこのような集団と集団をわけへだてている厚い壁を取り去り人間とその話し合いを成立させる責任を教会はもっており，それが教会の果すべき和解者としての聖務であると主張する。

「奉仕の教会がなすべき和解の聖務は，社会における相互の信頼と意思の疎通を回復することである。この意味において，愛はお互同志の話しあいを回復することであり，愛の聖務（ミニストリー）とは，人間相互が再びコンミュニケーションを再開する働きに外ならない。」(103頁)

この場合，教会はただ話しあうというのでは不充分で，非人格化がなされつつある現実をよく把握し，とりわけ社会のさまざまな組織の中において，権力支配，搾取，極端な病的にゆがんだ感情，そして偏見や憎しみが有している状況において，人間が自由と責任をもった存在としてお互が招かれていることを人々によびさますことが重要であり，その様な働きこそが教会の和解者としての務めを具体的に表明するものである。

また，教会の奉仕の業は教派を超えて一致してなさるべきことも力説されている。(131頁)

5

大都市は，救贖史の観点からすると，変革しつつある人間の状況であると同時に，神がそこに存在し，また常にともにいまし給うという終末論的な現実である。ウィンターはこの様な観点に立って，「出発点としての終末」(The End as Beginning) という標題を最後の章につけて現代社会における教会の終末論的な意義を述べている。キリスト者にとって，終末は神の手にあるということは，歴史から逃れることでなく，自己の歴史的存在を支え，社会におけるたたかいに力の源を提供するものである。

ここで，面白い考えは，現代の社会に慢延している現代人の傾向として，社会的健忘症

(Social Amnesia) という現象をとりあげていることである。健忘症とは物忘れのことをいう。個人の生活では「忘れん坊」と呼ばれ，多少愛嬌のある悪いくせである。しかし，人間の果すべき社会的責任となると事は面倒となってくる。現代人は，お互の競争と不信の関係にあって，お互が人間であるということ，共にこの社会の前進のために役割を果すべきパートナーであるということを忘れて了っている。彼は，この現象を「お互が人間であることに対する健忘症」(a deep forgetfulness of our common humanity). と呼んでいる。(137頁)

その他，自分の仕事を忙しくしているが，その意味や目的について考えず，住宅地の自己の私生活に逃避することは，職業的健忘症 (Occupational Amnesia) であり，小さな自分の周囲の政治的利害関係に身をやつし，正義と人権の導重のために果すべき根本的な政治的責任に眼を蔽うならそれは (Political Amnesia) である。さらに，憂うべきことは，多くの教会は，住宅地における制度的教会の維持発展に心を奪われ今日の現代人が葛藤している都心の組織における人間の課題に眼をふさぎがちであり，それを宗教的健忘症 (Religious Amnesia) と呼ぶ。

ウインターは，キリスト・イエスにある福音の出来事は，そのような社会的健忘症に罹っている現代人を覚醒する働き (The work of anamnesis) をなすものであり，現代人が人間性の根底を支える源をそこに見出し，個人の内的な関心から，社会生活における人間は責任を果す方向えと人々を導くものであることを主張している。(141頁)

6

このようなウインターの論旨に対して，二三の批評を加えて筆をおくことにしたい。

まず第一に，彼の著作の貢献として，あげられることは，現代社会の具体的な状況から浮き上った教会に対する批判的検討に終ることなく，教会を神学的にも実践的にも建設的にとらえてゆく態度のあることである。現実の社会の状況に教会が迎合するのではなく，また教会が変革してゆく社会から遊離して古い形感を旧態依然して固守しようとする現状を背定するのでもなく聖書に示されている教会の光にてらして，この時代の状況の中に教会制度の在り方を検討している。

この点において，ウインターの論旨は，社会学的な教会の否定的な批判に陥ることなく，現代社会の認識に立った上で，教会の体制を建設的に論じている。この態度は日本においても論ぜられている「体質の改善」においても大事な態度であるように思う。

第2に，日本における教会の性格と，アメリカにおける教会のそれその間には可成り多くの開きがあり，ウインターの論じている点をそのままに日本の教会に導入するわけにゆかない点もある。たとえば，ひとえに世俗化といっても，米国のように，現在でもなお全人口の半数以上の人口がなんらかの形でキリスト教会に参与している状況と，キリスト者の総数が全人口の1パーセントに及ばない状況では可成りの相違点がある。この点において日本においては，キリスト教が少数者であることをはっきりと認識し，世俗世界から浮き上ったり，それに追従して了わない，創造的な少数者となる必要がある。

第3に，ウインターが分析している現代の都会人の性格は，日本の大都市に住む人間の

様相に共通したものがあり，参考になる点が多い。しかし，日本の状況において忘れてはならないことは，日本の近代化の過程は未だその日尚浅く，技術社会の形成と封建社会から近代社会の移りかわりが同時になされつつあるためにいろいろの混乱や無理のあることである。「年功序列制」「学閥的党派主義」「日和見的な調和主義」「未組織零細企業の労働者や臨時工の問題」「封権的な権威主義」など例をあげるときりがないが，在来の日本的な考え方がなお日本の産業社会の中に強く残存しており，近代化の過程に摩擦をおこし，いたるところで「人間の破れ」を呈している。このようなところに，日本の産業社会においては，とりわけスポットをあててみなければならない問題である。

最後に，ウインターが提起している二，三の神学的な問題は今後もわれわれが検討してゆくべき内容を含んでいる。たとえば，はじめにあげた「世俗世界」の理解，また，おわりに述べた「終末」の理解など，現代の都会の現状に照らし，再検討していることは意味深いことと思う。(竹中正夫)

Johann Schasching S. J.,
Kirche und Iudustrielle Gesellschaft, 1960. 274 p.
247 Seiten, Verlag Herder, Freiburg/Bàsel/Wien.

本書は，ウィーン・カトリック社会カカデミー Die Katholische Sozialakademie Wien がその叢書の第1巻として出版したもの。著者ヨハン・シャッシングはオーストリアのインスブルック大学の社会学の教授。

産業社会という新しい事態の前で一般的に人間，特殊的に教会はその存立と立場を根本的に問われている。これは今世紀の思想家，またキリスト教神学者の等しく認識するところである。著者は社会学の立場から産業社会（勿論欧米の）を分析しようとする。彼はこの重大な問題に答え得るとは僭称せず，産業社会のなかに新しい教会の Standort を探すための一種の試験穿孔 (Versuchsbohrung) を志す。従ってこれは，例えばボンヘッファーの Sanctorum Communio のような，教義学に属する，「教会社会学」(Soziologie der Kirche) の研究ではない。

以下，内容の素描をする。著者によれば，産業社会は物質が過大な役割を演ずる「事物集約的社会」(Sachintensive Gesellschaft) である (S. 13)。生産の伸び方は烈しく，社会生産は二倍に，過去50年平均，時間当りの生産性は毎年2.5％から3％上昇，産業化されて以来ヨーロッパの人口は3倍になり，国民所得も労働所得も急増した。消費の拡大は生活必需品のみならず文化的欲求もみたし，史上はじめてヨーロッパでは大衆的繁栄が出現した。このような社会に生きている思想はといえば，「世界は製造することができる」(Die Welt kann gemacht werden.) というものである (S.17)。18世紀まではヨーロッパの人口の80％までが農民で，彼らは自然との特別な関係（それは待つこと Warten であった）にあり，自然のリズムを生活のリズムとし，畏敬が根本的態度であった。宗教が超越について語り得た訳である。ところが産業社会では，例えば神秘な夜もネオンサインが非神話化するように，何でも製造可能になった。このような世界は自明的に神的なものに